

第1章

概要

佐 光 美 穂

(1) 目的

課題研究を3年間継続して行うことで、ものごとの本質を捉え、既存の問題と潜在的な問題の発見を行い、論理的・多角的に考える力を育成する。そしてグローバル拠点での探究活動に繋げる。グローバルキャリアモデルのシンポジウムを通して、自己のキャリアパスに関する確固たるイメージを作り上げ、夢や目標を持ち、課題研究の質を深める。

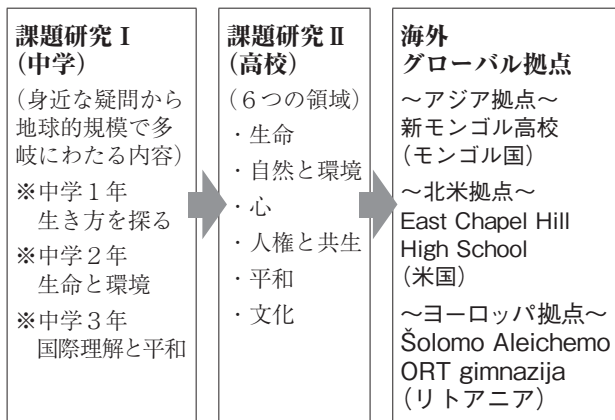
《期待される成果》

国際バカロレアTOKの趣旨を取り入れることで、研究を掘り下げ批判的思考力を獲得できる。アンケート調査・聞き取り調査、分析を行うことにより、情報リテラシーやエビデンスに基づいた仮説の検証を行う能力が育成される。プレゼンテーションや討論を通して、論理的に思考する力、協調的にコミュニケーションをとる力、チームとして協同的に問題解決にあたる力を獲得できる。

《内容》

6つの領域で行う課題研究の目的は以下の通りである。

生命	医学・健康	人権と共生	生存・差別・障がい
自然と環境	地球・食糧・エネルギー	平和	紛争・民族・国際理解
心	教育・犯罪	文化	言語・芸術・表現

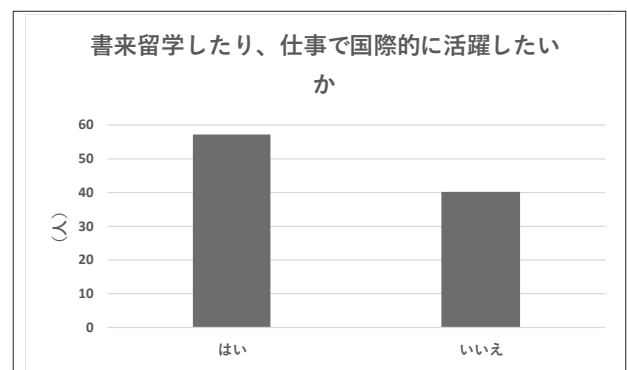
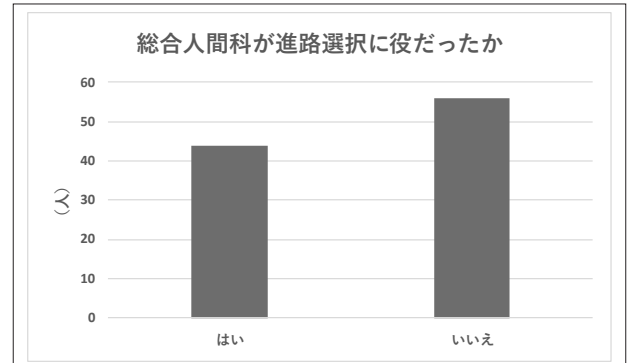


(2) 指導体制

全教員が関わる。各学年では高校課題探究Ⅱ「総合人間科」を中心的に行う責任教員が中心となり指導計画や実施計画を立案する。研究はPBL (Problem Based Learning) に基づいて3年間継続して課題研究を行う。高校1年生では、PBLの基礎基本を学ぶためのPBL入門を徹底して行う。高校2年生になると生徒が6つの領域に分れ、仮説検証型の課題研究を開始する。中間研究発表会を随時実施する。高校3年生では、研究成果を論文にまとめ、研究成果を発表する。

(3) 課題探究Ⅱの成果

SGH課題探究Ⅱを3年間経験した高校3年生のアンケート結果を以下にまとめた。



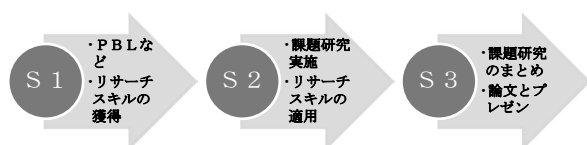
(4) 教育方法：PBL (Problem Based Learning) の概要

三年間の学びの基本を形成するプログラムとして、本校では高校1年次に、PBLの手法を採用している。本校のPBLとは、Problem Based Learningを原則とするが、担当教員によりProject Based Learningに近い形態となる場合もある。本校で実施するPBLについて、以下の項目に沿って説明する。

- ・高校3年間の総合人間科学習コースの中での位置づけ
- ・学習の目標
- ・対象学年と指導体制、学習形態
- ・学習の展開

1) 高校3年間の総合人間科学習コースの中での位置づけ

三年間の総合人間科は、概ね次のような形で進む。



PBLは課題探究の方法を実践的に学ぶためのプログラムとして、1年生に配置した。高校1年生の学習の中でも中核となる。ここで身につけたスキルを、2年次以降の学習で使って活動する。そのため、3年間の学習の中で基盤となるプログラムである。

なお、三年間の主な学習内容とおよその時期は次の表の通りである。

学年	時期	学習内容
S1	4～9月	6領域に関するキーワード収集 課題解決のための手法の学習 文献調査の手法(探し方、読み方、記録の作り方)
	10～12月	PBL1(課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ) 教員から与えられる課題を3か月で解決・達成する学習
	1～3月	PBL2(課題の分析、「問題」への分割、解決方法を実践的に学ぶ) 生徒は1とは違う教員の許で学習(教員は同じ課題を指導する) 情報マップ作成(個人テーマに関わる文献調査のまとめ)
S2	4～7月	領域別個人テーマ探究学習1 課題設定→課題解決(調査・検証)→ミニレポート ここで出た課題を次のクールのテーマにして良い
	9～12月	領域別個人テーマ探究学習2
	1～3月	領域別個人テーマ探究学習3

S3	4～9月	研究のまとめ1 S2時のミニレポートをもとに追加調査をし、論文化する
	10～12月	研究のまとめ2 論文を元に発表会

2) 学習の目標

学習目標は以下の2点である。

- 1 翌年以降の個人探究活動に必要なリサーチ・スキルを身につける
- 2 PBLでの学習経験を次年度の個人探究につながるように整理する

スキルを身につけさせることと並んで、ふりかえりの作業を重視した。グループでの協同学習なので、全ての学習過程を一人が体験できるとは限らない。そこで自分達の学習活動の経過を言語化し、記録をつけることで、他者の経験を含め、次年度に何を活かし、何を繰り返すべきではないのかを明確に意識させることが必要と考えたからである。

本プログラムを通して生徒に身につけさせたい手法は、具体的には以下の通りである。

- ・問いの立て方、課題の分析のしかた
- ・資料の探し方
- ・クリティカル・リーディングの方法
- ・研究計画の立て方
- ・各種調査方法(文献調査、インタビュー、アンケート、観察などの現地調査など)とその段取りの仕方
- ・レポートのまとめ方

いずれのスキルについても、課題探究を独り立ちして行えるようになることを目指す。

3) 対象学年と指導体制、学習形態

本プログラムは、高校1年生120名全員を対象として実施する。授業は原則として、隔週木曜日の午後、2時間連続で行われる。

指導は高校1年の学年担当の教員6名が担当する。生徒は20人を標準とするグループに分かれ、それぞれに1名ずつ教員がついて指導に当たる。なお、グループ編成は、教員が研究テーマを提示し、生徒から希望を集め、第3希望までに入れるよう調整して組んだ。

6つのグループに分かれた後は、次項で提示する過程に沿って協同学習を行った。グループ内部で、学習の展開に従って、さらに小グループやペア、必要に応じ個人での活動を組み合わせた。どの時期に、どのような単位で学習すると効果的かは学習テーマに左右される部分もあるので、グループ担当教員の裁量に任せた。

2019年度のグループ別学習課題は次の通りである。

テーマ一覧
名大附属の下校時刻は適正か。
食習慣の乱れは心に影響を与えるか。
名大附属の三者協議会を有意義なものにするにはどうしたらいいか。
e-ポートフォリオはどのようなものがよいか。
指紋認証は大事なものを守る鍵として問題はないか。
名大附属学校の図書館の図書の貸出数を増やすにはどうしたらいいか。

4) 学習の展開

PBLは、それぞれ、次の学習過程を踏んで展開する。過程を編成するにあたり、(3)で示した身につけさせたいスキルを意識した。

順序	学習過程名	概要
1	課題の分析	教員から与えられた課題を分析し、以下の作業をする。 1 キーワードを定義する 2 課題を解決可能な具体的な問題へ分割する
2	研究計画作成	「課題の分析」の段階で分割した「問題」を一覧し、いつまでに、どの順で実施するか決める
3	第一次問題解決	計画に基づいて調査を実施する
4	第二次問題解決	前段階で新たに生まれた問題や、調べきれなかった問題を解決するため調査を実施する
5	結論	個人でミニレポートを書き、「課題」に対する答えを自分の答えを作る
6	ふりかえり	グループで問題解決の過程を振り返り、研究の進め方や方法論として良かったこと、改善すべきことを確認する。

協同での問題解決であるため、それぞれの過程が終了するごとに、グループ内で現状報告や、全員が知っておいた方がよい情報の共有などをする。

高校2年生での学習活動は、個人単位で基本的に上記のステップを踏んでいくので、高校1年生で一通りの学習の流れを経験させることを重視する。

(文責 佐光美穂)